

防犯教育に関する新たな教育方法の構築 —小学校における異年齢集団活動による安全教育実践とその有効性—

Construction of New Educational Methods for Crime Prevention Education : Safety education practice by different age group activities and its effectiveness

八木 利津子
YAGI Ritsuko

< 要旨 >

本研究は、異年齢集団活動による安全学習が児童にもたらす影響を見出し、主に登下校の安全など学外で起こりうる危機防止について児童が主体となって学ぶ活動可能な新たな学習方法の構築に向けた教材づくりとその有効性を検証する。方法は筆者が提案した視覚教材を活用して児童主体による実演動画を視聴する前後に、状態不安尺度による変化に基づき調査した。その結果、特に2年生や3年生の状態不安の最大値が低くなり、データ全体の散らばり幅も小さく変化し、児童の不安軽減に結びついたことが明らかにみられた。

キーワード：異年齢集団活動・学校安全・防犯教育・視覚教材

1. 緒言

近年の痛まし過ぎる事件・事故に、日々子どもたちの健康と命を守る養護教諭らは言葉を失い、子どもたちの安全や安心の確保に、また新たな課題が突き付けられている。

2017年には、千葉県松戸市における登校中の小学3年女児殺害¹⁾、2018年新潟市で発生した過去類例を見ない小学2年女児絞殺²⁾、同年富山市の小学校敷地内拳銃乱射児童緊急避難³⁾、同年静岡県藤枝市で下校途中の小学4年男児ハンマー殴打襲撃等の衝撃的な凶悪事件⁴⁾が連続し、子どもを持つ日本中の保護者を震撼させる犯罪は後を絶たない。2019年には川崎市多摩区の路上でスクールバスを待っていた小学生らが包丁を持った男に襲われ、2人が死亡し、17人が重軽傷を負う事件が発生した。私学公立問わず徒歩通学より安全と考えられていたスクールバスの利用者が狙われたと本事件は衝撃が大きかった。

いずれの学校においても、登下校中の防犯訓練や見守り活動等による防犯対策は講じられ、様々な避難訓練のうち不審者対応に関わるシミュレーション訓練は取り入れられている。こうした状況下で、2018年6月に内閣府は再発防止策の「登下校

防犯プラン」⁶⁾を公表し、2020年6月の「性犯罪・性暴力対策強化のための関係府省会議」⁷⁾においては「性犯罪・性暴力対策の強化の方針」が決定し、子どもを取り巻く社会的環境の変化に即した学校安全の取組に期待が高まっている。

事件が起こった当該学校では、危機遭遇後のケアにも追われて、現場の先生方のご苦難や心痛が想像できる。近隣の学校では、助長された模倣犯に対する警戒や対応に神経を研ぎ澄まし、見守り活動の範囲を拡充したり通学路の安全点検を入念にしたりと環境整備にも万全を期して努める実態もある。

そこで、今日のコロナ禍では、危機遭遇体験を想定した防犯教育カリキュラム作成と学習内容や学習方法の再検討が必要と考える。多様な学習方法を導入したり、再発防止のために学校と地域が連動する危機体制を確認したりすることが求められる。

2. 研究の背景

現在、地域に消失されたとされる異年齢集団であるが、岩崎（1998）の調査⁸⁾では、学童保育で存在していることが確認されている。学童保育では様々な人間と一緒に生活や活動をしており、地域でみられなくなった異年齢集団で構成された「第二の家庭」と呼ばれる場所が存在する。例えば地域のスポーツ少年団もその一つであろう。このように地域に異年齢集団は消失されたとされている一方で、異年齢集団活動の存在の必要性やその効用について以下に述べる

異年齢集団の機能・効用について、小石（1999）⁹⁾は、異年齢集団では高学年になるにつれて、積極的な仲間関係が可能となり、社会的スキルを獲得する機会が得られるということを示している。学級集団内では消極的な児童も、異年齢集団内では積極的に関わることも可能であり、高学年になるまで個人が経験してきたものが仲間関係を構築する際に、その経験を踏まえて発揮できると考えられる。河村（1996）の研究¹⁰⁾においても、異年齢集団では協力を図るという目標達成のための機能の他に、親和を図るという集団をまとめる機能もみられており、異年齢集団活動の経験の効果として、社会的スキルやコミュニケーション能力を高める要因としている。また、異年齢集団の中で児童の役割として、「協力を図る場面において、グループ内での最年長の児童が作業についての判断や実行をすることにより、目標達成に貢献していることから、リーダー的役割での最年長児が常に集団をまとめているのではなく、最年少児が注目することによって集団のまとまりが図られる」とも示唆している。

笠井・松村（2007）¹¹⁾は、中学生を対象とした調査によれば、学童期に異年齢集団への参加経験を持つ者は関係回避（一人で遊ぶ、友達にあまり話しかけられない等）や孤立の行動が少ないと示している。また、岡本ら（2014）¹²⁾は、異年齢集団がコミュニケーションの機会を増大すると報告している。

しかし、異年齢集団活動が学校安全にもたらす心的影響に関する知見、例えば、異年齢集団活動が及ぼす安心感等の変容を明示した調査結果や報告は少なく、異年齢集団活動による防犯対策に関わる実践的研究も見当たらない。また、学年別に比較した社会的健康面の検討にも至っておらず、検証事例としては課題が残る。

そこで、筆者（2018）¹³⁾は、先ず近隣の協力校 20 校において独自の縦割り防犯学習プログラムと地域参加型の安全教育を提案し試行したところ、実践後には重症な傷病者・欠席者・不登校の減少、防犯意識の向上等、異年齢集団による危機予防の教育効果を得ている。さらに、筆者（2020）¹⁴⁾は、ヒヤリハット報告などの危険体験の発信が外傷の重症化予防に繋がり、緊急時の組織体制づくりの有効かどうか実践的に検討した結果、とりわけ登下校中の傷病予防は、保健室と通学サポーターなど地域と学校の連携強化や異年齢集団活動の有用性を示している。

これらの予備的検証を踏まえて、今後は、児童、教職員、地域住民らの日常のヒヤリハット事案を収集し、学校主体の防犯教育を見直すことが重要である。加えて、多様な危機的状況を想定して行う教育方法の開発が不可欠と考える。例えば様々な侵入事件や不審者対応を想定したシミュレーション体験等や異年齢集団活動による新たな安全教育の方法を展開していく必要性がある。

3. 研究の目的

防犯等に関わる新たな教育活動について考究するという観点から、新学習指導要領に強調されている小学校における安全教育活動に注目した。本研究では効果的な安全教育の取組方法を探るとともに異年齢集団活動による安全学習が児童にもたらす影響について成果と課題を検討する。具体的には、学校内外において起こりうる重篤な危機の遭遇を防ぐために児童らが主体となって学ぶ持続可能な安全教育の方法の構築とその有効性について検証する。

4. 研究の方法

安全に関する教育活動について筆者が作成した壁新聞である掲示教材（図 1）と解説資料「子どもの安全・安心確保のためにいま考えること」^{15) 16)}を活用し、防犯に関わる登下校の学校安全を中心とした学習内容を上級生が調査対象の下級生に提示する。学習内容の伝達方法は、筆者作成の提示教材に基づき、上級生が主体的に劇のシナリオを作成し、実演する指導方法を選定した。教示の仕方については、児童オリジナルの自作自演の寸劇（図 2～図 7）を学習者の前で演じる方法と事前に寸劇の実演を撮影しその動画視聴により下級生に伝達する教示法とした。そして、Spielberger 氏が作成した原案 STAI 版から、肥田野氏らの研究により日本の文化的要因を考慮して開発した日本語標準化された新版 STAI 版¹⁷⁾を用いて、状態不安の質問項目を「安心している」「気持ちが落ち着いている」「楽しい気分になる」「う

れしい気分になる」「心配なことがある」「緊張したりドキドキしたりする」「イライラする」「自分の考えに自信がない」など、筆者が学童期向けに改編し効用の有無を測定した。具体的な調査については、上級生が下級生に登下校の安全に関わる学習を実践する前後に、2年と3年の児童に対して、状態不安尺度の14項目、56満点の指標による自記式質問調査を実施した。4年と5年の児童に対しては状態不安尺度の20項目、80満点の指標による自記式質問調査を実施した。いずれも「ほとんどない」「ときどきある」「たびたびある」「ほとんどいつもある」の4件法とした。なお、1年児童は実践後に教示内容と今後の留意点の2項目について自由記述による振り返りを回収することとした。

回収した記述はKHコーダー¹⁸⁾により抽出された頻出語からキーワード分析をする。

調査対象：都心部の市街地に位置する公立A小学校1年生26名、2年生27名、3年生30名（育成学級1名含む）、4年生36名、5年生39名の計158名の児童を対象に、安全教育の新たな手立ての一つに視覚化教材を媒介として、6年児童が下級生に伝達する教育手法を模索するという観点から最高学年の6年生を除外した。

調査時期：2020年3月～2021年10月

倫理的配慮：所属大学の研究に関する倫理指針に基づき個人情報を守り調査協力校については、研究の目的、意義、個人情報の保護等の事前説明を行い、情報の守秘等を徹底して同意が得られた対象者のみを調査対象として個人が特定できないよう匿名化されたデータをもとに管理、分析を行った。データは研究終了後、破棄する。（承認番号：19 桃教大総 15-3）

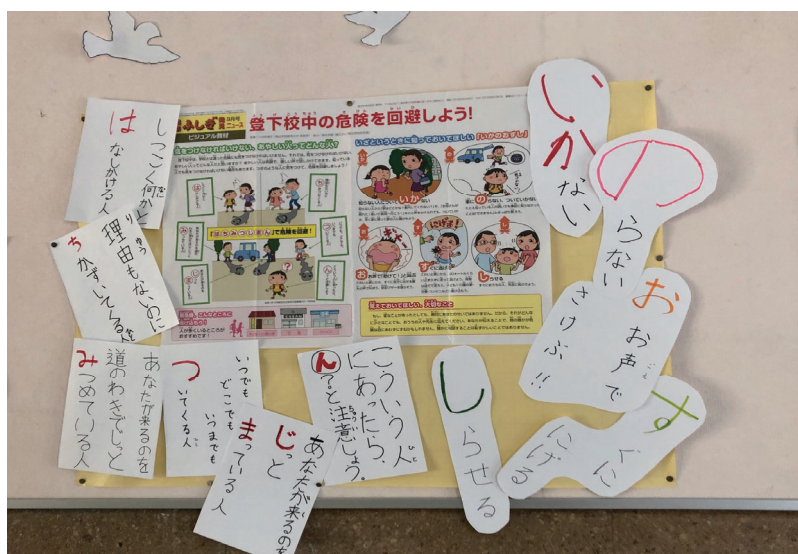


図1 防犯教育の壁新聞教材「はちみつじまん」と「いかのおすし」（筆者作成・清永奈穂協力）

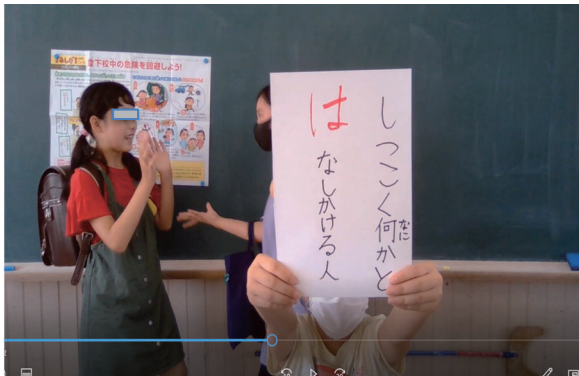


図 2 児童による寸劇場面①



図 3 児童による寸劇場面②

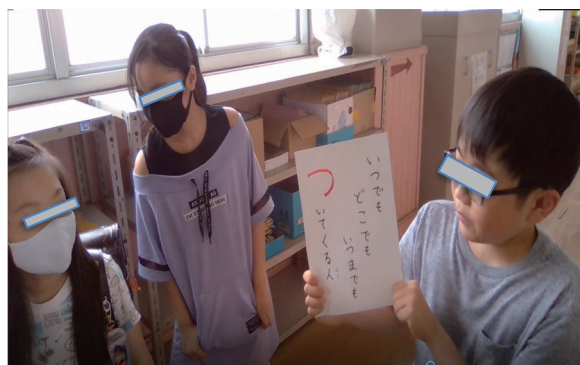


図 4 児童による寸劇場面③



図 5 児童による寸劇場面④



図 6 児童による寸劇場面⑤



図 7 異年齢集団活動における寸劇場面の様子⑥

5. 結果

(1) 学年別の状態不安の変化

以下に異年齢活動を導入した防犯教育の実践前後に状態不安尺度により得点化した数値を図で表したものを2年～5年まで示す。

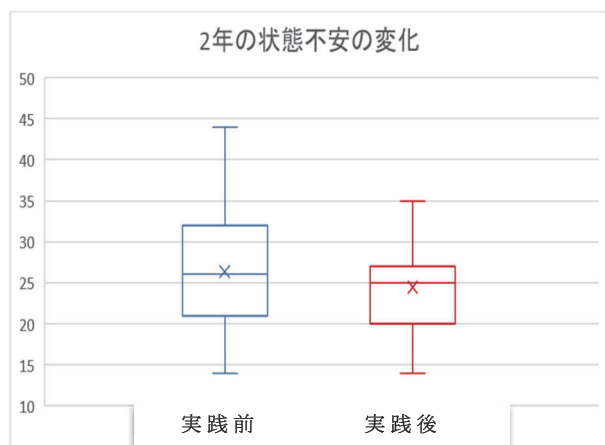


図8 2年の実践前後の変化 n=27

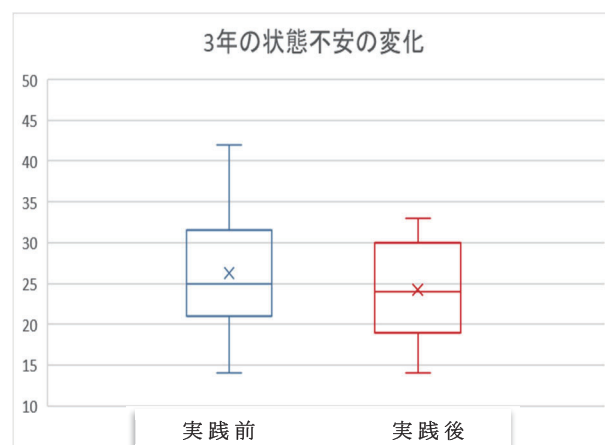


図9 3年の実践前後の変化 n=30

2年生は、最小値と中央値と平均値の変化はみられなかったが、実践後の最大値が下がっている。また、データ全体の値が減少していることが図8からわかる。

3年生は、最小値と中央値と平均値は変化なしだが、実践後の最大値が低くなっている。データ全体値の散らばりが小さくなっていることが図9からわかる。

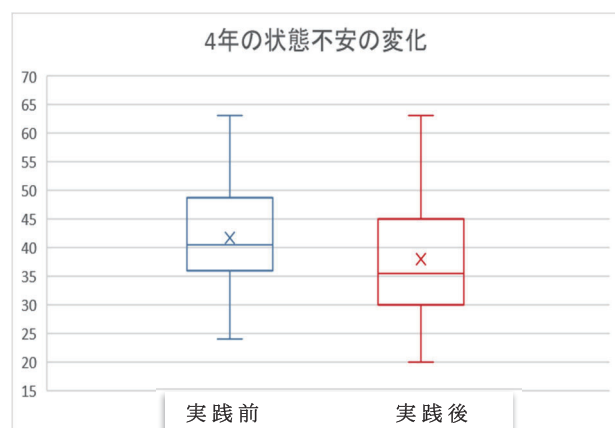


図10 4年の実践前後の変化 n=36

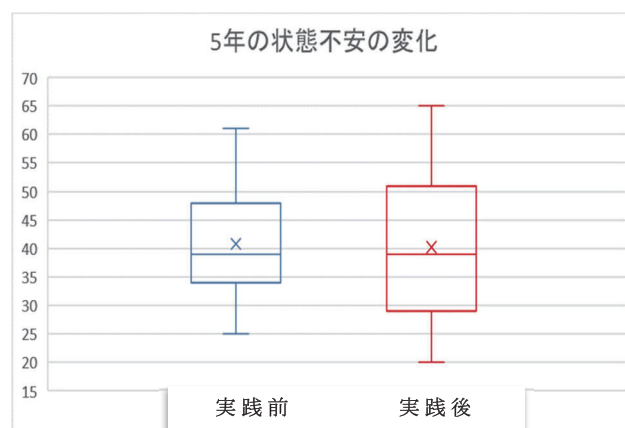


図11 5年の実践前後の変化 n=39

4年生は、最大値の変化はみられなかったが、最小値と中央値と平均値は実践後の状態不安が低くなっておりデータ全体の値が減少していることが図10からわかる。

5年生は、中央値と平均値は変化なしだが、実践後の最大値が大きく、最小値が小さくなっている。データ全体の値の散らばり幅が拡がり大きく変化した(図11)。

(2) 2年～5年の最小値・最大値・平均値・標準偏差表

以下は、学年別に実践前後の最小値・最大値・平均値・標準偏差を表に示す。

表 1 2年・3年の実践前後の標準偏差

項目・学年	2年実践前	2年実践後	3年実践前	3年実践後
最小値	14	14	14	14
最大値	44	35	42	33
平均値	26.33333	24.48148	26.24138	24.2069
標準偏差	6.666667	5.493231	6.990906	5.897862

表 2 4年・5年の実践前後の標準偏差

項目・学年	4年実践前	4年実践後	5年実践前	5年実践後
最小値	24	20	25	20
最大値	63	63	61	65
平均値	41.72222	37.97222	40.82051	40.25641
標準偏差	9.923628	11.41998	9.865433	11.9673

(3) 1年生の自由記述

以下に未記入を除外し原文のまま示す

① 6年生からどのようなことをおしえてもらいましたか？

1年（男）

- ・どうろでふざけているとけがをすることをおしえてくれました。
- ・わるい人はいつもにこにこしているからきをつけるおはなしやった。
- ・知らないひとにはついていけないのがわかりました。
- ・やさしい人のはなしをしていました。はちみつじまんのはなし。
- ・あぶないことをはなししてくれました。
- ・知らない人のはなしがありました。
- ・はちみつじまんをはなししてくれました。
- ・かえるときにきをつけることをはなししてくれました。

1年（女）

- ・あぶないことやしたらあんこと、そとであぶなことかいろんのはなしをしてくれた。
- ・はちみつじまんがよくわからなかったけどはちみちじまんというのがしれてとてもよかった。そしてもっとこころがあんぜんなきもちになった。
- ・はちみつじまんをおぼえる。
- ・あぶないことをおしえてくれました。どんなおはなしかというとかえるときのあぶないことをおはなししてくれました。
- ・はちみつじまんのおはなしもしてくれました。
- ・そとであそぶときのおはなし。
- ・はしっていたらともだちをきずつけるのがわかりました。
- ・はちみつじまんのはなしをしてくれました。
- ・こうつうるうるをまもることと、あぶないことはしてはいけない。
- ・たすけてくれるひとをよぶ。
- ・はちみつじまんがたいせつとおもいます。
- ・ころんだりこけてけがしないためにクイズとかはちみつじまんとかをこうぐねんのおにいさんとおねいさんにおしえてもらった。

②登下校でこれからきをつけようとおもったことをおしえてください。

1 年（男）

- ・いかのおすしがわかりました。あやしい人にやることをがんばります。
- ・きょうしつやどうろではもうはしらない。
- ・うんどようじょうやどうろでひとをおさないのことがきよつける。
- ・あんぜんにかえろうとおもいます。
- ・はちみつじましらがおはなしおした。
- ・どうろではしらないとおもった。

1 年（女）

- ・よそみとかをきょうつけてよそみをしない。
- ・かえるときに、こうしないといけないんだとおもいました。
- ・あそびながらかえると大けがになるからきけんです。
- ・はちみつじまんのしらない人これからはしらない人にきよつけてじぶんのいもちをまもっていきたいです。
- ・じことかよそみをきおつけたいです。
- ・きけんなことはしたい。
- ・わるい人はどこでもいるということがわかりました。
- ・こうつうおまもる。
- ・はちみつじまんがきよつけたい。
- ・いろいろなところに行くときにろうかやそとなどにきおつけないとけがをすることとかがわかったからこれからたいせつにしたいことがわかりました。
- ・じぶんではしらないことをしりました。
- ・ひだりがわをあるくことをしれてよかったです。
- ・いかのおすしがたいせつなのわかりました。
- ・これから、じぶんのいのちをまもってじけんやけがのないようにきをつけて、みをまもるように、がんばります。
- ・ちゃんといのちをまもってきおつけてあるきます。
- ・いかのおすしのことでいろいろこうゆうことは、あぶないとかがしれました。
- ・これからはきをつけてこうどうしたいです。

上記から“いかのおすし 19)”や“はちみつじまん 20)21)”の合言葉に随伴する振り返りが頻出した。特に“はちみつじまん”に関する記述と交通ルールに関する記述が多く、危険な出来事はどんなときか実演場面でわかった様子であるが、不審者に遭遇した時に大声を出す、にげるなど不審者対応についての記述はみられなかった。

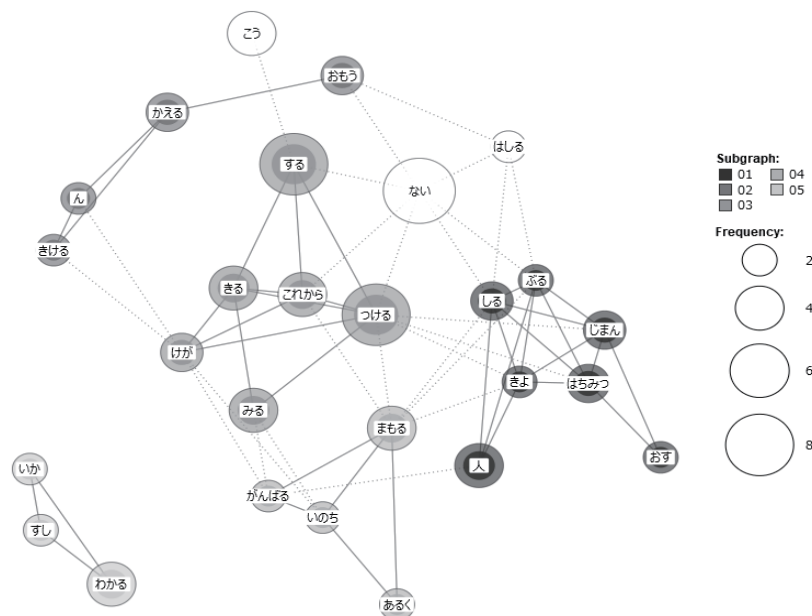


図 12 「気をつけたいこと」1 年自由記述の共起ネットワーク

図 12 に示すように、これから気を（きよ）つけることが中心性にあり、「はちみつじまん」という言葉を「知る」が濃く共起しており、「いのち」を「まもる」「がんばる」に強くつながっていることがわかった。一方、「いかのすし」が遠くに布置されており、改めて「わかる」と認識したことが把握できた。

いかのおすしは、1 年生も聞き慣れて幼児期から馴染みのある合言葉であることがわかった。

6. 考察

今回の研究を通して、1 年生への教育効果は、自由記述や動画視聴時の態度観察のみに限定され客観的なデータが得られなかった点は課題が残る。

しかし、上級生の動画による教示は、日頃の担任による教示と違い特別感があり、「はちみつじまん」や「いかのおすし」などの言葉が「いのち」を「まもる」ための言葉であることに繋がっていることやこれから気をつけたいこととして印象強く、心に留まっていることが明らかである。1 年生にとって不審者対応のスキルを身につけるには繰り返しの体験型学習（練習）が必要であろうが、図 12 の共起ネットワークから身を守る手段として新たなキーワードとなる言葉を習得したことが示されていることから、登下校時の防犯そのものに興味関心を高めた 1 年児童が増加したことが予想される。加えて、合言葉を覚えることが主たる目的ではなく、自らが危険回避する力を身につけようとしているか確認しておくことが問われる。ここでは、合言葉が先行して、教育的観点（効果）が薄れてしまうことも考えられる。そのため、上級生が演じる動画視聴によって言葉の真意をどこまで 1 年生が理解しているのか、自分の身を守る術となっているのかについて留意しながら動向を見守り、補足指導が必要な場面も想定される。

図 8～図 10 の結果からは、学年が下がるほど、実践前後の差異が大きくなっており、上級生が下級生に及ぼした影響が反映された結果と換言できよう。すなわち、最高学年の 6 年生が作成した動画視聴や壁新聞の伝達学習を踏まえて、低学年児童は防犯教育を考える動機づけの機会が得られるだけでなく、登下校の安全で気をつけるための新たな知識を学習する上で、上級生に対する親近感が影響したのか不安の緩和に有用であったと言える。

特に 2 年生（図 8）や 3 年生（図 9）の状態不安の最大値に着目してみると、いずれの学年においても減少しており、最も不安がっている児童らの不安軽減に結びついたことが明らかである。また、データ全体の散らばりも下がっていることから、学年全体の不安傾向が緩和されたことが確認できる。

このように、異年齢集団活動による学習が一人でも多くのいのちを守るために、校内の仲間同士の繋がりによって心ひとつに取り組むメリットは大きいと考える。

一方、4 年生（図 10）と 5 年生（図 11）の結果から、2 年生や 3 年生と異なる

傾向が得られている。4年生では実践後の最大値のデータ変化はみられなかったものの、状態不安の最小値がさらに低い数値を示していることと、データ全体の散らばりの幅が広がっていることから、学年全体の不安傾向が分散したと言える。異年齢集団活動により防犯教育の安全学習を終えて、個々の考え方や見聞の拡がりに期待するところであり、探求心の個人差の表れであろう。

また、5年生（図 11）と表 2 の結果からも、学年全体が示す状態不安の散らばり幅が、4年生よりさらに大きい散らばり幅となって示されており、防犯に関するリスク回避の指向性に拡がりをみせたと考えられる。そして、次年度には最高学年として下級生に安全に関する学習伝達の方法について考え教示する立場であることから、他人事ではなく、自分事として「自分が演者として下級生に防犯について伝達するならばどうしたらよいのか」など現実的な課題意識として考えを深める場と捉えていたことも予測できる。すなわち、高学年は伝達者いわゆるサポート役としての自覚を高めた結果、状態不安の散らばり幅が大きく拡大したのではないだろうかと考える。

7. 結語（課題と展望）

今回の調査は小学校での僅かな実践であり、児童の背景（学力、家庭環境）や背景（学校環境、教師の指導力）など様々な要因が問われてくると考えられ、学校や地域の実態に即して課題が残るが、本研究を通じて、ICT 活用を視野に入れて対面で伝える方法以外に動画視聴により伝える有効な方法を模索した実践の一事例を成したと言えよう。

実践後の調査結果から、動画による児童の自作自演（実演）などの伝達法は、上級生と下級生が教え学び合う方法としても持続可能で簡便な安全学習の浸透化に期待はできるものの、対面による温かみや上級生の熱量が伝わりにくいデメリットを有する。

したがって、現行で実践されている安全教室等イベント型の防犯教育の継続を考慮しつつ、並行して異年齢で学び合うピア（仲間）サポート体制を視野に入れた教育活動を学校内で計画し実行することが益々望まれる。その土台づくりのために、身近な危険防止を題材として、いつでも活用できる視覚的教材として児童が演じる動画配信による異年齢集団活動の教示（提示）は有効な方法であり、学習環境の維持に一定の効果が得られると判明した。それらの視覚教材を有効活用して、自主的で対話的な価値ある安全学習が学校内で共有できるように生活空間（学習環境）の確保とピアサポートプログラムの提言や実践的研究を継続していく必要がある。

謝辞

本研究にあたって、ご協力いただきました A 小学校の教職員や児童の皆様方にはここに深く感謝の意を表します。

参考文献

- 1) <https://mikaiketsujiken.jp/2020/08/08/千葉小3女児殺害> (閲覧日 2020/3/20)
- 2) <https://www.msn.com/ja-jp/news/national/東洋経済ONLINE> (閲覧日 2021/2/10)
「凶悪事件を起こす「少女 A」たちの共通点 新潟少女殺害事件はなぜ防げなかったのか」2018 年 6 月 10 日
- 3) <https://www.asahi.com/articles/ASL6X5FMFL6XPTIL01S.html> (閲覧日 2020/3/21)
朝日新聞デジタル「小学校校舎にも銃撃、天井にめりこむ銃弾 富山 2 人殺害」2018 年 6 月 28 日
- 4) <https://www.asahi.com/articles/ASL6M6427L6MUTPB01P.html> (閲覧日 2020/4/7)
朝日新聞デジタル「静岡県藤枝市で下校途中の小学 4 年男児ハンマー殴打襲撃等の衝撃的な凶悪事件」2018 年 6 月 19 日
- 5) <https://www.nikkansports.com/general/nikkan/news/201905280001007.html>
日刊スポーツ「朝の通学風景が十数秒で惨劇の現場に川崎刺傷事件」2019 年 5 月 29 日 (閲覧日 2020/4/10)
- 6) https://www8.cao.go.jp/youth/bouhan/pdf/h30_honbun.pdf (閲覧日 2020/3/8)
内閣府「登下校防犯プラン」登下校時の子供の安全確保に関する関係閣僚会議 平成 30 年 6 月 22 日
- 7) https://www.mext.go.jp/content/20210406-mxt_kyousei02-000014005_1.pdf
文部科学省「性犯罪・性暴力対策の強化の方針の決定について（通知）」2 文科教第 253 号令和 2 年 6 月 12 日 (閲覧日 2020/6/27)
- 8) 岩崎未来「地域の学園を超えた縦関係の実態・学号保育における異年齢集団の存在」<http://jinrui.apa-apa.net/soturon/paper/iwasaki.pdf>, 1998 (閲覧日 2020/6/28)
- 9) 小石寛文「小学生の同年齢集団内と異年齢集団内における仲間関係の取り方や事故効力感の違い」『日本教育心理学会総会発表論文集』第 41 号, P439, 1999
- 10) 河村由香「異年齢集団における子どものコミュニケーション方法」『大妻女子大学紀要一家政系』第 34 号, pp.247-249, 1996
- 11) 笠井達夫・村松昌弘「学童期における異年齢集団活動と社会的スキルの習得」『徳島文理大学研究紀要』第 74 巻, pp.43-53, 2007
- 12) 岡本悠子・大野桂・小枝達也「小学校の異年齢集団交流による児童間の親密度の変化」『地域学論集』第 10 巻第 3 号, pp.85-89, 2014
- 13) 八木利津子「小学校における異年齢集団活動がリスクマネジメントに及ぼす効果に関する研究—養護教諭がコーディネートする教育実践に着目して—」『幼少

児健康教育研究』第3巻第2号, pp.71-82, 2018

- 14) 八木利津子「地域と協働する学校安全共育プログラムづくりの事例検討 ―小学校における登下校のヒヤリハットに基づく危機管理体制の実践的介入―」『桃山学院教育大学研究紀要』第2号, pp.204-216, 2020
- 15) 八木利津子「いま、防犯教育を問い直す ～安全・安心をめぐる課題の複雑化とセーフコミュニティ活動～」『心とからだの健康』Vol.23, pp.18-28, 健学社, 2019
- 16) 八木利津子「いま、防犯教育を問い直すー子どもの安全・安心確保のためにいま考えること」『健康ふしぎ発見ニュース』pp.2-7, 健学社, 2019
- 17) 肥田野直・福原眞知子・岩脇三良・曾我祥子・Charles D.Spielberger「新版 STAI 状態―特性不安検査」2021, 実務教育出版
https://www.jitsumu-kyouzai.com/wellness/show_product.php?pid=75
- 18) 樋口耕一『KHCoder を用いた計量テキスト分析実践セミナー』, 2018, 株式会社 SCREEN アドバンスドシステムソリューションズ
- 19) 警視庁「おやこでまなぼう! 「いかのおすし」で毎日安全!」2004 考案・2022 6.23 更新
(い) かない (の) らない (お) おごえをだす (す) ぐににげる (し) らせる
<https://www.keishicho.metro.tokyo.lg.jp/kurashi/higai/kodomo/kodomo110.html>
- 20) 清永奈穂『「いかのおすし」だけで子どもは守れる? -親子で知りたい防犯教室』
<https://dual.nikkei.com/atcl/column/17/050700085/060100002/>
- 21) ステップ総合研究所『子どもの安全研究活動～犯罪及び地震からの子どもの安全～』「不審者・あやしい人ってどんな人?」(は) なしかける (ち) かづいてくる人 (み) つめてくる人 (つ) いてくる人 (じ) っと (ま) っている人こんな人にあったら、「ん?」とちゅうい! https://www.ri-step.co.jp/?page_id=18

本研究は、2019 年度～2021 年度科学研究費（課題番号 19K14218）の助成を受けて行った調査研究の一部である。

Construction of New Educational Methods for Crime Prevention Education : Safety education practice by different age group activities and its effectiveness

YAGI Ritsuko

Abstract

This study examines the impact of safe learning through activities of different age groups on children and verifies the creation of teaching materials and their effectiveness for constructing new learning methods that enable children to take the lead in learning about the prevention of crises that may occur off-campus, mainly in terms of safety in commuting to and from school.

The method was investigated based on changes in the state anxiety scale before and after watching the children's demonstration video using the visual aids proposed by the author.

The results revealed that the maximum level of state anxiety, especially in grades 2 and 3, was lowered, and the scattering range of the data changed slightly, leading to a reduction in children's anxiety.

Keywords: cross-age group activities, school safety, crime prevention education, visual aids